



昭和戦中期に国民学校の児童が描いた絵画  
「兵隊さんに朝夕感謝」〔加藤フサ子資料〕



福岡市博物館  
Fukuoka City Museum

展示解説

第 37 回新収蔵品展

## ふくおかの歴史とくらし

令和7年11月12日(水)～令和8年2月1日(日)

企画展示室 1 ～ 4

開催にあたって

福岡市博物館は、開館の7年前(昭和58・1983年)の博物館建設準備室発足以来、考古・歴史・民俗・美術の分野の資料収集を続けてきました。寄贈や寄託、購入によって収集した資料の数は20万件以上にのぼります。

収集した資料を後世に確実に引き継ぐとともに、展示や研究に有効活用するため、当館では、新たに収蔵されるすべての資料について調査と整理を行い、そのリストを『収蔵品目録』として刊行し、公式ホームページにおいて「福岡市博物館所蔵品データベース」を公開しています。また、目録刊行にあわせて、博物館の資料収集活動を広く市民の皆様を知っていただくため、『新収蔵品展』を開催し、新たに加わった資料をご覧いただける機会を設けています。

37回目を迎えた今回は、『収蔵品目録』第40号に掲載した令和4年度収集資料2904件の中から「ふくおかの歴史とくらし」に関わる約70件の資料を厳選し、「福岡藩ゆかりの品々」「福岡ゆかりの人とまつり」「福岡のくらし」「福岡の職人の仕事」の4つの章で紹介しています。

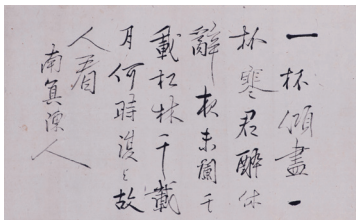
本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。また、ご観覧いただいた皆様にとって、この展覧会が、ふくおかの歴史と人びとのくらしについて、より一層の関心を寄せていただく機会になるとともに、当館の資料収集活動にご理解とご協力をいただく契機となれば幸いです。

### 一 福岡藩ゆかりの品々



(上) 作者は福岡藩御用絵師 小方(尾形)守厚(1722-1781)。代々御用絵師を世襲した尾形家の中でも高く評価された6代目当主。雲を突いてそびえる雪化粧の富士山とその裾にひろがる名勝三保の松原を駿河湾の対岸から描く。

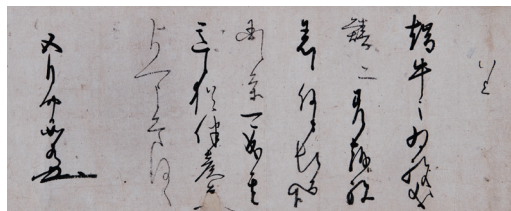
〔青木富美子資料(追加分)〕



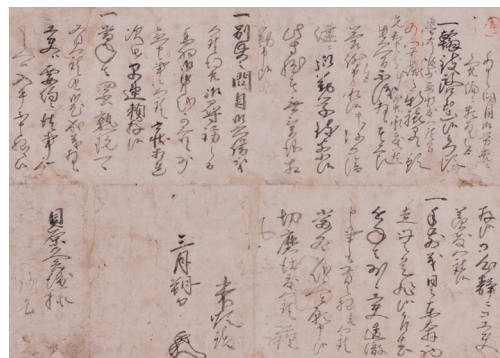
(上) 福岡藩の儒学者・亀井南冥による漢詩。酒杯を傾け、故人に思いをはせる様子がかうかがえる。南冥夫人の富は文化4(1807)年、3男の大年は同11年に没している。詩はそうした喪失感を抱く南冥自身の状況を詠んだものであろうか。南冥本人は、文化14(1817)年に死去している。〔石橋啓延資料〕



(上) 高橋達が黒田家から拝領した竹図。本図は、福岡藩11代藩主・黒田長濤が描いたもの。高橋達は明治19(1886)年、イギリス・ケンブリッジ大学に在学中の黒田長成(長濤の孫)に従うため渡英、自らも同大学で理財学を修めた人物。帰国後、長成が長濤の遺品として本図を贈った。〔福岡藩料理方高橋家資料(追加分)〕



(上) 福岡藩士・松本家に伝来した黒田如水(孝高、官兵衛)の書状。端午の節供の祝儀として緒が送られてきて満足に思うこと、すぐに下国することを伝える内容。松本家は、初代・勝重(光勝)の後、長男・勝良と次男・利勝の2家に分かれ、それぞれ歴代の当主が福岡藩の船手頭を務めた。〔松本須美子資料〕



(上) 木下順庵が貝原久兵衛(益軒)に宛てた書状。書状では、順庵からの質問に対して、急ぎの返答を依頼している。木下順庵は、新井白石、室鳩巢、雨森芳洲など多くの門人を育てた儒学者。加賀藩前田家に仕え、のちに幕府の儒官となる。〔嶺知己・さえ子資料〕





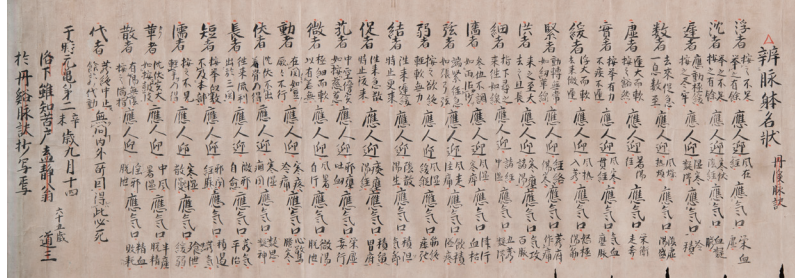
(上) 福岡藩士・西川家に伝来した四条流の伝書。西川家は、豊田秀吉・秀頼父子に仕えて四条流の庖丁道を相伝し、大坂夏の陣後に福岡藩主黒田家に仕えた家。西川正次は四条流庖丁道をもって黒田家の饗膳を取り仕切り、歴代の当主は福岡藩の御料理人頭を務めた。〔西川正夫資料〕



(上) 槍術をかわれ、福岡藩に仕えた小山田家に伝来した槍。穂先が短く、刺突に特化した実戦的なものである。〔小山田榮資料（追加分）〕



(上) 福岡藩に仕えた毛利家に伝来した脇差。毛利家は毛利元就の一族元辰に始まる。元辰の嫡子が黒田長政に仕え、その子孫に至り、歴年の功績が認められ、中老格となった。〔兼松隆之資料〕



(上) 福岡藩の本道（内科）医・鶴原家に伝来した脈診の秘訣を記した覚書。作者の「雖知苦戸」「壺静翁」は、戦国時代から安土桃山時代にかけて活躍した医師・曲直瀬道三の別名。鶴原鷹林は、福岡藩3代藩主・黒田光之に侍医として仕え、光之の死に際して、その最後まで診療にあたった。

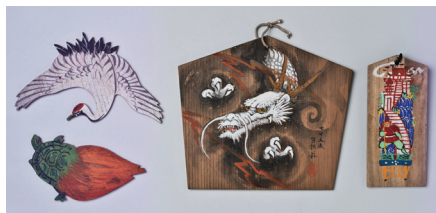
〔鶴原清二資料〕

(左) 博多中島町で提灯屋を営んだ伊藤家（屋号・菱屋）に伝来したもの。箱の底にある墨書から、福岡藩士味岡團兵衛からの贈物であったことがわかる。〔大田文恵資料〕



(上) 文化4（1807）年に博多土居流のぎょうのちよう行町が仕立てた山笠の彩色図。「前太平記」に載る源経基が大鹿を一矢にて仕留めたエピソードが主題。先端が細く尖る形で19世紀初めの山笠の特徴がうかがえる。文化期の山笠図は他の類例が少なく貴重である。〔購入資料〕

(下) 松源寺（博多区千代）の第10代住職・佐々木滋寛(1899-1976)が収集した博多の小絵馬。鶴、亀、千支（辰）などの縁起の良い図のほか、同氏が戦前まで福岡周辺でみられた博多祇園山笠を描いた小絵馬を奉納する風習に着想を得て、昭和5(1930)年に考案した「絵馬郵便」がある。〔佐々木滋寛資料〕



(左) 安本江陽(1888-1944)が使用したカメラ。安本は、明治時代から昭和時代の写真家。明治43(1910)年に開催された第13回九州沖縄八県連合共進会の写真展覧会に出品した作品が一等に選ばれたことをきっかけに博多で写真館を開いた。〔安本研二資料〕



(上) 名人と呼ばれた博多人形師・小島与一の最後の弟子で、独立後は有名人らの肖像人形で手腕を発揮した亀田均 作の博多人形。〔亀田均資料〕



(左) 福岡県内で鍛刀された刀。日本刀の復興を目指して昭和10（1935）年6月に設立された大日本刀匠協会が主催した新作日本刀展覧会の入賞作品とみられ、第2次世界大戦中に日本刀の代用品として作成された昭和刀と一線を画する。板目肌の肌理が細かい本造りの日本刀である。〔小屋松儀晃資料〕

## 二 福岡ゆかりの人とまつり

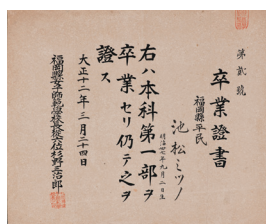




(上) 石堂地藏尊 (博多区千代) の地藏盆の際に、道辻に飾られた巨大な灯り「大灯籠」(同地では「エマ」「トウロウエマ」と呼ぶ)に描かれていた絵。市内最小の大灯籠絵である。〔深川克彦資料〕

(右) 大正時代から昭和時代の海軍軍人が着用した軍服で、儀式用の正装。上衣は立襟の燕尾服型。帽子、正肩章、正剣帯(ベルト)が付属する。上衣の襟章は尉官を示す意匠であり、正肩章には大尉以上が付ける総(金モール)がある。日中戦争開始後の昭和13(1938)年7月以降、正装は着用を停止された。

〔西岡弘晃資料〕



(上) 女性教員の養成機関であった福岡県女子師範学校の卒業証書。福岡県師範学校から女子部が独立する形で明治36(1903)年に成立した。〔山本真木資料〕



(上) 戦中戦後の物資不足のなかで考案された手製の手巻きタバコ巻器。ベルトの上に葉となるものを入れ、ローラで挟み込み紙を巻き付けてつくった。〔吉倉慶子資料(追加分)〕



(上) 魚の通り道に仕掛けて魚を捕る刺網漁などで、網が動かないよう固定するおもりと考えられている。〔梅木昭和資料(追加分)〕



(上) 日本の旧石器時代を代表する道具(ナイフ形石器)。切る・削る用途のほか、棒の先端につけて槍として使われた。〔藤木聡資料〕



(左) 東亜勸業博覧会は、福岡市西公園下の大堀埋立地で昭和2(1927)年3月から5月にかけて開催された。博覧会開催を記念して発行された写真誌は、博覧会の盛況や福岡市内の名所、発行者の福岡日日新聞社が博覧会場で開催したイベントの様子を紹介する。〔武内公磨資料〕



(上) 豊州炭鉱(田川郡川崎町)の経営者宅で、宿泊する客のために用意された布団。紫の絹地に鳳凰と菊・桐の吉祥柄があしらわれている。〔笠置美枝子資料〕



(上) 婚礼に際し寄贈者の祖母が自らの織った布で仕立てた布団。井桁紋に貝箱があしらわれている。〔竹内陽子資料〕



(上) アルミ製箸付き弁当箱。昭和時代に福岡で開催された博覧会にはさまざまな日用品も出品された。〔株式会社UACJ 金属加工資料〕

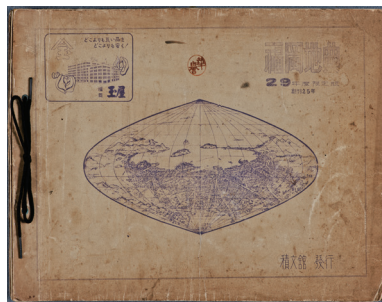


(上) 戦前、兵士への慰問品のひとつとして粉ハミガキが送られた。(左) 戦前(右) 戦後のパッケージ。〔ライオン株式会社資料〕

### 三 福岡のくらし



(右) 福岡市中央区にあった銭湯「荒戸湯」(1926-2020) に掲示されていた 1966 年公開の映画のポスター。東中州の劇場で上映された際のもので、同時上映の紙がついており、当時の市内の映画館の様子を伝える。  
〔当仁校区自治協議会資料〕



(上) 昭和 29 (1954) 年度版の福岡市の住宅情報地図。通りに町名を付け、区画ごとに所有者、店舗等の名称を記す。商店が密集する新天町商店街については、別に詳細な地図を掲載する。  
〔吉原章資料 (追加分)〕



(上) 大正時代に福岡へ嫁入りした女性が、持参した這子。這子はいはいする乳幼児をかたどった人形で、子の誕生時に縫い、加持祈禱を経て、魔除けのために子の枕元に置く。特に女性は、生涯近くに置いた。〔河野麻知子資料〕



(上) 博多織の端切れを繋ぎ合わせて製作したタペストリー。〔西村英俊資料〕



(上) 米国ニューヨーク州の骨董市で発見された博多人形。終戦後、進駐軍の購買部 (PX = 売店) で販売された、PX 人形と呼ばれるものだろう。  
〔Sonoka Fukuma Gozelski 資料〕



(上) 磁器製の酒樽。元岡村 (西区元岡) にあった造り酒屋「宮本屋」の貸出用の酒樽で、樽の上部から酒を入れておき、下から出す仕組み。運搬しやすいように上部には取っ手が付いている。また表面には、宮本屋で造られていた清酒「瑞穂」の銘や樽番号が記されている。  
〔黨悦子資料〕



(左) 昭和時代、櫛田前町 (博多区冷泉町) などにあった鮎屋「太郎鮎本舗 松尾商店」で使用された帳簿〔松尾孝司資料 (追加分)〕と、  
(右) 松尾商店からのれん分けした「太郎鮎本舗 西新支店」で平成 3 (1991) 年まで使用されていた鮎切鉄。博多鋏の製作技術を用いたと考えられる〔柴田邦夫資料〕



(上) 博多曲物の製作工程見本。本工程は、曲物に使う薄板を湯で煮て柔らかくし、巻木に巻きつけて板を曲げ、板の端「マチ」同士を重ね合わせた後の工程で、木缺ではさみ、留具で仮止めして形を整える状態を示している。  
〔柴田徳商店資料〕



(左) 高取焼の陶器ポンプ。井戸用のポンプには木製に次いで陶器が用いられ、水道が一般化するまで広く普及した。高取焼は江戸時代初期に誕生し、茶器は福岡藩の名産品であった。江戸時代の中ごろから西皿山 (早良区高取) で生活用品を製作する。明治時代以降は日用雑器や置物、産業・建設用具まで幅広く製造した。  
〔森幸次資料 (追加分)〕

## 四 福岡の職人の仕事

ご協力いただいた方々  
(寄贈・寄託者名/順不同 敬称略)

福岡市博物館	〒八四一〇〇〇一
福岡市早良区百道浜三丁目一番一	
☎〇九二一八四五五〇一一	
ライオン株式会社	
濡衣山 松源寺	
当仁校区自治協議会	
高宮八幡宮	
宗教法人臨済宗幻住庵	
上魚町葛城地蔵尊保存会	
株式会社UACJ金属加工	
山田修三	山本真木
安本研二	柳澤晶子
嶺さえ子	毛利一孝
水口健吾	御田伴廣
松田好喜	松本須美子
藤木聡	正木佳織
秀村研二	深川克彦
西村順子	西村英俊
中間令三	西岡弘晃
寺本眞須美	黨悦子
田中由美子	樗木薫
竹内陽子	田中清重
柴田淑子	島本脩
坂本浩美	崎村哲士
ゴゼルスキー福岡園佳	小室松儀晃
久保堅二	向野也代
河野麻知子	木村和男
加藤フサ子	兼松隆之
大田文恵	大山宣夫
上村篤子	梅木昭和
池田節子	石橋啓延
	衣斐英美
	大楠麻里
	笠置美枝子
	亀田フミ子
	草場七生
	小金丸昌子
	武内由紀
	柴田邦夫
	田中千賀子
	鶴原清二
	永井光清
	西嶋竹廣
	東田敬子
	藤井英子
	松尾孝司
	松本幸子
	三井信子
	森幸次
	山上静子
	吉原章